

琵琶湖疏水（第5報）

明治元勳が名を連ねたトンネル洞門石額

1) 本稿の要旨

明治維新の荒波を越えてスタートした新政府は、実行すべき多くの課題をかかえていたが、急務といわれていたのが輸送網の近代化であった。このため先進国から多くの技術者を雇用し、指導を受けた。陸運では、英国技師らの指導により鉄道網の建設を進め、海運ではオランダ技師らの指導により港湾施設と河川整備を進めた。

京都市では、陸運面で問題が多かった輸送ルートとして、「琵琶湖疏水」を建設して琵琶湖～京都～淀川～大阪間の舟運ルートを確立したが、当時としては外国人の直接指導なしに推進した日本最大規模の難工事であり、完成したときは明治天皇のご臨席のもとに竣工式を祝った。このような土木工事は成果が目に見えるので、明治政府は疏水にある3ヶ所のトンネルの出入り口に近代的な洞門を付け、当時の主要閣僚が石額を掲げて世に喧伝したのである。

2) 石額を掲げた6人の明治元勳

政府要人がトンネルの出入り口に石額を付けた例は他にも見られるが、琵琶湖疏水の場合は明治時代に活躍したトップクラスの元勳(総理経験者が多い)が6人も登場している。

場所	揮毫者	職名	揮毫漢詩	出身
第1トンネル東口	伊藤博文	総理大臣	氣象萬千	長州
第1トンネル西口	山縣有朋	内務大臣	廓其有容	長州
第2トンネル東口	井上馨	外務大臣	仁以山悦智為水歡	長州
第2トンネル西口	西郷従道	海軍大臣	隨山到水源	薩摩
第3トンネル東口	松方正義	大蔵大臣	過雨視松色	薩摩
第3トンネル西口	三条実美	内大臣	美哉山河	公家



伊藤博文の石額のある第1トンネル東口洞門



西郷従道の石額のある第2トンネル西口洞門

3) 建設開始までの政府と京都市との交渉経過

琵琶湖疏水建設計画の政府への申請段階であった明治16年(1883)は、三条実美が太政大臣(総理格)を勤めた太政官制の末期であり、着工した明治18年(1885)は、太政官制から内閣制に変わって伊藤博文が総理大臣であった。そして、完工した明治23年(1890)は山縣有朋総理の時代になっていた。

京都府の北垣国道知事は明治16年計画書を持参して、参議井上馨邸で会議を開いているが、この時の出席者は公家の三条実美を除く石額揮毫者の5人であった。井上馨も後に短期間首相代理を務めており、伊藤博文は4回、松方正義は2回、山縣有朋は2回総理となっている。このように、6人の石額揮毫者には明治における元勳といわれる超大物の政治家が名を連ねたのである。

西南戦争により、薩長連合の中での長州の立場が強くなった時期の建設であり、工事面でもっとも重要であった第1トンネルの出入り口の洞門石額の揮毫者を長州で抑え、全体として長州：薩摩：公家の揮毫者数が3：2：1であるのも、当時の政界の勢力バランスを示している。

4) 追記

この6ヶ所にある洞門石額は、国の史跡となっているが、説明板がなく見え難い場所にあるので、疏水の散歩道を歩いても気がつかずに通り過ぎてしまう。しかも揮毫された横書きの漢詩も右から左に書かれており、漢詩の意味も理解しがたい。揮毫者・漢詩の意味など記載した説明板をそれぞれの場所に設置したいと考えている。

琵琶湖疏水には、上記6ヶ所以外に久邇宮国彦殿下・北垣国道・田辺朔郎の石額が存在する。現地見学を希望される場合、下記ホームページを検索するか、蹴上の琵琶湖疏水記念館で洞門石額の予備知識を得て見学することをお薦めする。

関連ホームページ http://www.geocities.jp/biwako_sosui/

琵琶湖疏水の観光開発を推進する 近代京都の ^{いしずえ}礎 を観る会

会長 高桑暉英